様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３９９２

研究課題名（和文）高齢者の健康関連QOLを高める生活行動意識アセスメントと支援方法の構築

研究課題名（英文）Developing occupational identity questionnaire and support methods to enhance health-related quality of life for the elderly

研究代表者
鹿田　将隆（Masataka, Shikata）

常葉大学・保健医療学部・講師

研究者番号：２０７８２１８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，地域生活を送る要支援・要介護高齢者の生活行動の意識を聴取する高齢者版生活行動意識アセスメントを開発した．COSMINに準じて，内容妥当性，表面妥当性，構造的妥当性，基準関連妥当性，内的一貫性を検討した．本アセスメントは，「現在の認識と将来への期待」「過去の認識」「現状への満足感」の3因子から構成されており，高齢者が自分はどのような作業をする存在であり，将来はどうありたいのかという認識をとらえることができる．また，本アセスメントに基づいた事例研究では，対象者が望む生活に関する情報が得られ，具体的な活動と参加を支援する目標設定に有用であった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
　高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けるためには，支援者は高齢者がもつ日常生活や人生を反映した個別的なニーズを聴取する必要がある．本アセスメントは，そのような高齢者の生活行動の意識を聴取することを可能にするという点において，学術的な意義がある．そして，本アセスメントは，高齢者の活動と参加を支援するリハビリテーションサービスの提供に貢献することが期待され，社会的意義は大きいと考えられる．

研究成果の概要（英文）：An occupational identity questionnaire for community-living older adults requiring care was developed in this study. The content validity, face validity, structural validity, criterion-related validity, and internal consistency were examined according to COSMIN (COnsensus-based Standards for the selection of health Measurement INstruments). This questionnaire is composed of three factors: “Sense of past self,” “Sense of present self and future expectations,” and “Satisfaction with the current circumstances.” The tool enables individuals to assess who they are and who they aspire to be in the future. Case studies based on this assessment provided information about the participant’s desired life. They were useful for setting goals that support specific activities and roles.

研究分野：社会福祉学関連

キーワード：地域在住要支援・要介護高齢者　リハビリテーション　健康関連QOL　作業療法　質問紙　生活行動　作業同一性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

要支援・要介護認定者（以下，要介護者等）が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように，医療・介護の現場で高齢者の生活支援の一助を担う地域リハビリテーションの重要性は増している．そこでは，高齢者がもつ日常生活や人生を反映した個別的なニーズを聴取し，高齢者の気概や意欲を引き出すことで，活動や参加などの生活行動の向上をはかる生活支援が求められている．このように要介護者等の心身機能だけでなく，活動と参加，個人因子に介入する包括的なリハビリテーションサービスの提供を厚生労働省は求めているが，現状は，身体機能に偏った支援にとどまっている[1)]．

人間作業モデル（Model of Human Occupation；MOHO）は，生活行動がどのように動機づけられ，習慣化され，遂行されるのかを説明し，さらに，生活行動に取り組む中で，自分は何者であり，どのような存在になりたいのかという作業同一性（以下，生活行動の意識）が作り出されるとしている[2)]．つまり，生活行動の意識は，自分がどのような生活に興味や満足を見出すのか，他者との関係から自分がどのような役割を担っており，期待されていると感じているのかなどの複合的な自己認識のことである．以上から，生活行動の意識を評価することは，要介護者等の活動と参加の向上に役立つ有用な情報をもたらすといえる．

２．研究の目的

本研究の目的は，地域生活を送る要介護者等の生活行動の意識を聴取する高齢者版生活行動意識アセスメント（作業同一性質問紙）を開発することと，それに基づいたリハビリテーションサービスを提供するための支援方法を構築し，そのマニュアルを作成・公開することである．

３．研究の方法

１）高齢者版生活行動意識アセスメント案の作成（内容妥当性の検証）

先行研究[3)]で得られた地域生活を送る要介護者等の生活行動の意識の概念を用いて，生活行動の意識を調査する質問項目を作成し，その項目の内容妥当性を検証する．

（１）対象

高齢者の生活行動の意識を熟知する者として，高齢期リハビリテーション領域の教育研究に従事し，かつ，同領域での十分な実務経験を有するセラピストを対象とする．

（２）方法

Delphi 法を用いる．これは高齢者版生活行動意識アセスメント案の項目が，要介護者等の生活行動の意識を聴取できるかについて合意を得る方法で，3 段階によって検討する．質問紙の内容妥当性は，content validity index（CVI）を算出することによって評価した．基準は，Polit ら[3)]の報告に基づき，item-level CVI（I-CVI）は 0.78 以上，scale-level CVI value with an averaging method（S-CVI/Ave）は 0.90 以上の場合を良好な内容妥当性とした．

２）高齢者版生活行動意識アセスメント案の作成（表面妥当性の検証）

（１）対象

介護保険の通所・訪問系サービスを利用している高齢者 5 名

（２）方法

高齢者版生活行動意識アセスメント案を対象に実施した．その際に，各質問項目に対して，「理解することが難しい」，あるいは，「答えることが難しい」とした項目があった場合は，表現の必要性を共同研究者と検討した．

３）高齢者版生活行動意識アセスメント案の信頼性，構造的妥当性・基準関連妥当性の検証

（１）対象

介護保険の通所・訪問系サービスを利用している高齢者 100 名とする．

（２）方法

対象の一般情報（年齢，性別，介護保険サービスの種別と利用期間，医学的情報），日常生活活動の状態として Barthel Index（BI），対象の QOL 評価として日本語版 EuroQoL 5-Dimension 5-Level（EQ-5D）を取得する．そして，高齢者版生活行動意識アセスメント案，作業遂行歴面接第 2 版（OPHI-II）の作業同一性尺度を実施する．

（３）統計学的解析

①構造方程式モデリングを用いて，項目因子の関係性をモデル化する．

②Rasch 評定尺度モデル（Rasch rating scale model；RSM）を使用して，構造的妥当性を検証する．

③高齢者版生活行動意識アセスメント案と OPHI-IIとのデータ間の相関係数を算出し，基準関連妥当性を検討する．

４）高齢者の生活行動の意識に基づく自立支援を促すための包括的な支援指針の開発

（１）ケーススタディ

介護保険の通所・訪問系サービスに勤務する研究協力者が，利用者である要介護者等に高齢者

版生活行動意識アセスメントを実施し，それに基づいた支援を行う．研究代表者は，研究協力者の支援に対し，適宜，スーパーバイズを行う．

（２）支援マニュアルの作成

①生活行動の意識の理論解説，②高齢者版生活行動意識アセスメント開発過程，③実施方法，④ケーススタディ，以上を記載した支援マニュアルを作成・公開する．

４．研究成果

１）高齢者版生活行動意識アセスメント案の作成（内容妥当性の検証）

対象となったのは，26 名の専門家であり，男性 21 名，女性 5 名であった．作業療法士としての臨床経験の平均年数は，6 年から 33 年であった（平均 15.0 年）．

第 1 回調査は 25 名（回収率 96.2%）で，I-CVI は，60.0%から 100.0%であった．S-CVI/Ave は 83.8%であり，S-CVI/UA は 2.0%であった．第 1 回調査では，コンセンサスの基準を満たさない項目は 13 項目であった．

第 2 回調査は 24 名（回収率 96.0%）では，第 1 回調査の結果，修正された 27 項目について専門家に尋ねた．その結果，I-CVI は 79.2%から 100.0%であった．S-CVI/Ave は 94.1%であり，S-CVI/UA は 25.9%であった．第 2 ラウンドでコンセンサスの基準を満たさない項目は項目 4 のみであった．第 3 回調査は 24 名（回収率 100.0%）が参加した．21 項目について尋ねたところ，I-CVI は 91.7%から 100.0%であった．S-CVI/Ave は 97.4%，S-CVI/UA は 57.1%であった．すべての項目が第 3 ラウンドでコンセンサスの基準を満たした．

２）高齢者版生活行動意識アセスメント案の作成（表面妥当性の検証）

本研究には，5 名の参加者（男性 2 名，女性 3 名）が含まれた．平均年齢は 75.2±3.90 歳であった．「理解することが難しい」あるいは「答えることが難しい」とされた項目，「理解することが難しい」にチェックがついた項目はなかった．「答えることが難しい」にチェックがついた項目は 4 項目であった．研究者間での検討の結果，そのうちの 1 項目は表現を修正し，他の 3 項目はマニュアル上で補足説明をつけるような対応をすることとした．

３）高齢者版生活行動意識アセスメント案の信頼性，構成概念妥当性・基準関連妥当性の検証

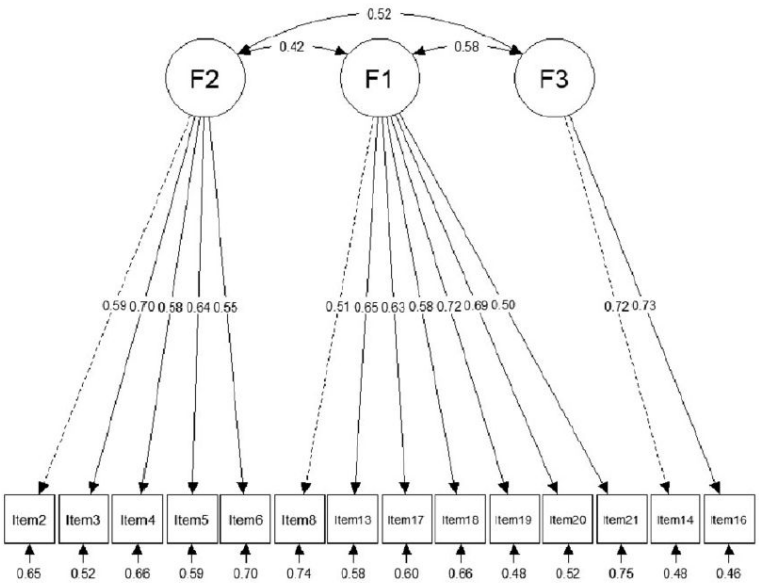
対象は，男性 42 名，女性 93 名の計 135 名（82.0±6.8 歳）であり，通所サービス利用者が 103 名（76.3%），訪問サービス利用者が 32 名（23.7%）であった．

高齢者版生活行動意識アセスメント案の探索的因子分析を実施した結果，因子負荷量が 0.40 以下の項目であった 7 項目が削除され，3 因子 14 項目となった．第 1 因子には，「生活の中に楽しみがある」「これからも周りの期待にこたえたい」などの 7 項目があり，「現在と今後の作業的存在」と命名した．第 2 因子は，「以前は，仕事や主婦業にやりがいを感じていた」などの 5 項目があり，「過去の作業的存在」とした．第 3 因子は，「自分の思ったように暮らしている」などの 2 項目があり，「現在の作業的存在に対する満足感」とした．

確認的因子分析の結果，得られたモデルの適合度指標は，$\chi 2/df=1.46$，GFI=0.91，CFI=0.94，RMSEA=0.058 であった（表 1）．確認的因子分析の結果より，高齢者版生活行動意識アセスメントの 1 次元性が確認できたことから，高齢者版生活行動意識アセスメントを RSM により分析を行った．その結果，対象者は 14 名（10.37%）が不適合，項目は 1 項目（7.14%）が不適合であった．RSM による結果は表 2 に示した．

高齢者版生活行動意識アセスメントの 14 項目の合計点と OPHI-IIの作業同一性尺度との Spearman の順位相関係数は 0.278（p＜0.01）であった．

表 1　確認的因子分析の結果



４）高齢者の生活行動の意識に基づく自立支援を促すための包括的な支援指針の開発

支援指針の開発に向けて，本アセスメントに基づいた 3 事例へのケーススタディを実施した．その結果，介入によって，人間作業モデルスクリーニングツールの結果は 3 事例ともに改善し，Barthel Index は 1 名，Frenchay Activities Index は 2 名において改善が見られた．しかし，このような変化に

も関わらず，高齢者版生活行動意識アセスメントの得点は減少する者もあり，点数の増減が作業同一性の改善・悪化と単純に解釈できるものではないことが考えられた．

ケーススタディを通して，本アセスメントを用いた面接では，各事例から，自分が過去，現在において，どのような作業を経験し，それに対してどのような意味づけをしているのかという語りを得ることができていた．そして，将来，どのような作業をしていたいかという，未来の自分に関する語りが得られた．これらの語りが介入指針として有用であった．また，本アセスメントの「過去の認識」から明らかになった情報をもとに，「現在の認識と将来への期待」としてあがった課題に働きかけたことが介入に共通していた．以上から，本アセスメントに基づいた包括的な支援指針を見出すことができた．

今後，高齢者版生活行動意識アセスメントに基づく支援マニュアルを用いて，介入研究を実施し，本アセスメントに基づく支援の有用性を検証していきたい．

引用文献

1） 厚生労働省：高齢者の地域における新たなリハビリテーションの在り方検討会報告書．http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000081254.html（参照 2021-3-26）．

2） de las Heras, CG., Fam, CW., and Kielhofner, G.（小林隆司・訳）：行為の諸次元．Taylor RR・編著（山田　孝・監訳）：人間作業モデル－理論と応用，改訂第 5 版，協同医書出版社，pp.132-150，2019．

3） 鹿田将隆，籔脇健司，野藤弘幸：通所介護を利用して生活を送る高齢者が作業同一性を構築するプロセス．作業療法ジャーナル 50（6）：601-608，2016．

4） Polit, D. F., & Beck, C. T. (2006). The content validity index: Are you sure you know what's being reported? Critique and recommendations. Research in Nursing & Health, 29(5), 489-497.

表 2　Rasch 評定尺度モデルの結果

	項目	項目難度推定値	標準誤差	Infit MnSq	Zstd	難度順位
過去の認識						
2	以前は，仕事や主婦業にやりがいを感じていた．	-0.37	0.18	1.43	2.7	9
3	以前は，心も体も元気に生活していた．	-0.88	0.18	1.15	1.1	13
4	以前は，人の役に立っていた．	0.13	0.17	1.20	1.3	7
5	以前は，苦労もあったが，よくやっていた．	-1.07	0.18	0.90	-0.7	14
6	以前は，他の人とうまくやっていた．	-0.31	0.18	1.01	0.1	8
現在の認識と将来への期待						
8	今は若いときのようにはいかないが，よくやっていると思う．	0.78	0.16	0.95	-0.2	3
13	生活の中に楽しみがある．	0.63	0.16	0.96	-0.2	4
17	何もないより，何かやることがあった方が良いと思う．	-0.50	0.18	0.94	-0.3	10
18	これからも，周りの期待にこたえたい．	0.63	0.16	1.03	0.2	5
19	これからも楽しく暮らしたい．	-0.66	0.18	0.76	-1.9	11
20	これからも，自分でやれることはやっていきたい．	-0.72	0.18	0.56	-3.8	12
21	今はやっていないことにも，挑戦してみたい．	1.11	0.15	1.19	1.4	1
現状への満足感						
14	自分の気持ちをわかってくれる人がいて，満足に過ごせていると思う．	0.30	0.17	0.99	0.0	6
16	自分の思ったように暮らしていると思う．	0.95	0.15	0.80	-1.5	2

Infit MnSq：infit mean square，Zstd：standardized as a z-score

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Shikata Masataka、Notoh Hiroyuki、Shinohara Kazuya、Yabuwaki Kenji、Ishii Yoshikazu、Yamada Takashi、Renee R Taylor	４．巻 31
２．論文標題 An examination of the psychometric properties of the occupational identity questionnaire for community-living elderly who require care	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Hong Kong Journal of Occupational Therapy	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1569186121997936	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Shikata Masataka、Notoh Hiroyuki、Shinohara Kazuya、Yabuwaki Kenji、Ishii Yoshikazu、Yamada Takashi	４．巻 23巻2号
２．論文標題 Content and face validity of an occupational identity questionnaire based on MOHO concept for community-living elderly people requiring support	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Japan Academy of Health Sciences	６．最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鹿田 将隆，篠原 和也，二村 元気，高木 初代，石井 良和，谷村 厚子	４．巻 25巻1号
２．論文標題 作業同一性質問紙の臨床的有用性の検討 地域在住要支援・要介護高齢者の3事例を通して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 作業行動研究	６．最初と最後の頁 30-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鹿田将隆,篠原和也,二村元気,高木初代,石井良和
２．発表標題 作業同一性質問紙を用いた支援の有用性の検討―地域在住要支援・要介護高齢者の3事例を通して―
３．学会等名 第30回日本保健科学学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鹿田将隆，野藤弘幸，篠原和也，籔脇健司，石井良和
２．発表標題 高齢者版作業同一性質問紙の信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 第54回日本作業療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高木初代，鹿田将隆，篠原和也
２．発表標題 作業同一性質問紙を用いた介入が意志の改善をもたらした通所リハビリテーションの一事例
３．学会等名 第54回日本作業療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 二村元気，鹿田将隆，篠原和也，小林法一
２．発表標題 作業同一性質問紙の使用により自宅での生活を再構築した一事例
３．学会等名 第54回日本作業療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 鹿田 将隆，篠原 和也
２．発表標題 作業同一性の情報は作業療法でどのように活用されているのかに関する文献検討
３．学会等名 第55回日本作業療法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 鹿田将隆
２．発表標題 Content and face validity of an occupational identity questionnaire based on MOHO concept for community-living elderly people requiring support
３．学会等名 第31回日本保健科学学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	篠原　和也 (Shinohara Kazuya) (20805775)	常葉大学・保健医療学部・准教授 (33801)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関